

## 図形楽譜から導く仮象空間に関する方法論的研究

## - 空間の変換手法「仮象図」の提案 -

## Methodological research on semblance space leading from graphic notation

## - Proposed methods of conversion space "Semlance figure" -

○吉村凌<sup>1</sup> 田所辰之助<sup>2</sup>\*Ryo Yoshimura<sup>1</sup> Tatsunosuke Tadokoro<sup>2</sup>

This is the thesis of the graphic notation. Graphic notation is a music that is notated by avant-garde musicians such as John Cage and Toru Takemitsu. Graphic notation is an emphasis on "visualization of sound". Visualization in graphic notation it is no figure in music differs in extreme and such staff notation. It also induces the act rather than being instructed to act. In addition, graphic notation is also assumes the interpretation of the age transition of the above, and I tried to deviate from the staff notation in the direction of that since the organization of the sound to musicians from the composer. Graphic notation in the notation, using a symbol that rely on visual performer. In other words, by introducing uncertainty to music and tried playing the musicians of the imagination.

## 1. はじめに

仮象図を考えるきっかけとなったのは、昨年の夏スイスの美術館に展示されていたゲルハルト・リヒターの抽象絵画を実見してからだ。その絵画があらゆるものを混在させて表現しているように、錯乱している都市の風景を混合させ抽象的に捉えることで、都市のもう一つの姿を発見できるのではないかという考えが浮かんだ。また、都市の混在さは音や風といった目に見えないものに落とし込まれているのではないかと考えた。そこで私は、これらのものを空間として成り立たせるノーテーション(記譜法)の作成の前段階として、建築の隣接分野である図形楽譜の研究を行うことにした。

Figure 1. Richter I <sup>★1</sup>Figure 2. Richter I <sup>★1</sup>

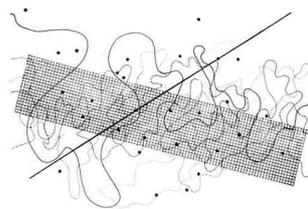
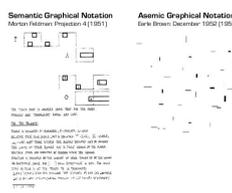
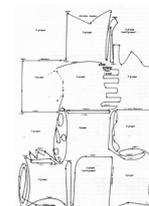
## 2. 図形楽譜の概要

図形楽譜とは、ジョン・ケージや武満徹といった前衛音楽家たちによって記譜された楽譜である。主に「音の可視化」に重点を置いているのだが、古代のネウマ譜、近代の五線譜も同様に音の可視化を行っている。しかし、図形楽譜における可視化は五線譜などと極端に異なり譜面では無く図式とし、行為を指示しているのではなく、行為を誘発し、文字や近代五線譜のおたまじゃくしだけに捉われない新たな記号によって構成されている。それらの構成は音楽批評家エルハルト・カルコシュカによって下記のように

に分類される。

- \*2 a) 骨組が精密で図形的効果が従属的に付加されているもの。
- b) 図形効果が優先であって、いくつかの精密な記述を伴うもの。
- c) 図形
  - 1 音高および音の持続の枠のあるもの。
  - 2 音高および音の持続の枠のないもの。
  - 3 1および2を自由にえらぶ。

## 3. 図形楽譜の実例

Figure 3. John Cage <sup>★2</sup>Figure 4. T. Takemitsu <sup>★3</sup>Figure 5. Kagel <sup>★4</sup>Figure 6. Logothesis <sup>★2</sup>

## 4. 図形楽譜を通した前衛音楽家達の狙い

そもそも音楽の譜面において最も重要なことは、「見た瞬間に直観的に、音のはっきりとしたイメージとなって伝わること」<sup>★5</sup>である。また、伝えると同時に保存手段としての重用性も担ってきた。そして、図形楽譜と対比させると五線譜は「行為の指示」<sup>★6</sup>と分類できる。しかし、技術

の進化につれ保存手段がレコード、CD、スマートフォンといった機械端末で処理できるようになっていった時代情勢において、楽譜に必要とされていることは何であろうか。また、当時の前衛音楽家達は何を思い五線譜からの逸脱を図ったのか。それは「書かれたものと読まれるものと分離がみられ、音を現出させるとめの方法」<sup>★7</sup>を生み出そうとした。近代五線譜による行為の指示は「演奏家の自主性を奪い、演奏から自発性を失わせることになる」<sup>★5</sup>。また、演奏者に押し付けることにもなる。図象楽譜は上記のジレンマと、時代変遷の解釈をも想定し、音の組織化を作曲家から演奏家に以降する方向性で五線譜からの逸脱を図った。

### 5. 不確定性とジョン・ケージ

不確定性の音楽を提唱したジョン・ケージ。彼は著書にて「耳がある場所には必ず音がある。必ず何か聞こえてしまう。限りなく無音に近付くことが出来る場所さえ、自分自身が音源として把握されてしまうことによってサイレンスは達成されない。」<sup>★8</sup>と述べている。つまり、この世のあらゆる空間に音（不確定な音）が満ちているということをケージは述べたかったのだと考える。記号としては、非常に抽象的で、軸線に沿った記譜を行っている。これは何でもありの音楽では決してなく、軸線を厳格とし構成されている。また、点と線と面という関係性から「時間」だけでなく「空間」としての転換をも彷彿させる。

Table 1. Symbol classification of John Cage<sup>★2</sup>

音高	音域	テンポ

### 6. ログテティスと図形楽譜

五線譜の  $j \cdot p \cdot f$  や図形楽譜の ● や ○ ・ ▲ ・ ■ といった記号は、数学でいう公式の  $a \cdot b \cdot x \cdot y$  であり、行為の指示にすぎない。しかし、ログテティスの記号構成では、 $p$  や  $f$  をオリジナルな図柄にしているだけでなく、五線譜の記号には存在しなかった言語的な要素の記号を導入している。それは下記表 2 に記したように、絵画や絵として読み取れるような動的記号に還元し、記号自身に動きを誘発する。

Table 2. Symbol classification of Logothetis<sup>★2</sup>

動的記号	抽象記号	総譜

### 7. 図形楽譜と仮象

図形楽譜は記譜を時間に転換した。しかし、音が空間であると捉えるのならば、図形楽譜は時間に限らず空間へも発展を遂げる。また「音の可視化」により、譜面に動的作用が生まれることから、音楽の領域以上の可能性を感じる。この可能性を空間への転換と捉えるのであれば、図形楽譜の理念を空間に落とし込む作用として下記の要素が挙げられるのではないだろうか。対象を選定する前提として、我々人間が空間・全体を感じとるものとして第一に「視覚」が挙げられる。そして第二に視覚の補佐として「聴覚」が挙げられる。「視覚」は空間や都市の対象物を把握する上で絶対的な存在であり、図式として記譜する上では、骨格を担うものであると考える。「聴覚」は前者と対象的に、固定的な観点では不確定なものである。しかし、受動性を含む「聴覚」には時間軸の激しい見えない空間のパラドックスを認知することに都合が良いのでは無いだろうか。

### 8. 空間への転換としての図形楽譜

図形楽譜の概念を建築空間に落とし込むメリットとしては、音を人々に知覚させることが挙げられます。元来の建築におけるノーテーション(記譜法)では、固定したものを作るわけでもなく、身体性が含まれているわけでもない。しかし空間は精神と身体を支配するものであり、建築は人の五感に働き掛けるものでなければならぬと考える。これらの操作を図形楽譜のような図式により組み立てることは、音を知覚することにつながる。

### 9. 結論

図形楽譜は記譜に、演奏者の視覚を頼りにする記号を用いた。つまり、音楽に不確定性を導入し演奏家の想像性の再生を試みた。図形楽譜の方法論、手法論を踏まえ、錯乱した都市、つまり「風景が入り乱れている」という要素と「現在、過去、未来」という要素をどう一つの図式に表現するのが次の課題となる。また、「聴覚」に変動性を持たせることで、可変性のある図式となるであろう。それゆえ仮象図は、見えない姿を表現するノーテーション(記譜法)となる可能性を持つ。

### 10. 参考文献

- ★1 ワコウ・ワークス・オブ・アート『ゲルハルト・リヒター 写真論/絵画論』(淡交社、2005)
- ★2 エルハルト・カルコシュカ『現代音楽の記譜』(全音楽譜出版社、1978)
- ★3 Theresa Sauer『Notations21』(Mark Batty Publisher、2009)
- ★4 秋山邦晴他『武満徹展 眼と耳のために』(文房堂ギャラリー、1993)
- ★5 吉田秀和「図形楽譜をめぐる(1)」『芸術新潮 1973-6』(新潮社、1973)
- ★6 遠藤良太「音楽の可視化と記譜」(1998)
- ★7 木下和重「図形楽譜の目指すものとその限界」(1999)
- ★8 佐々木敦「四分三十三秒のために約十五時間からの約一万字」『ユリイカ 2012.10』(青土社、2012)
- 小沼純一「都市の音/耳の論理」(10+1 DATABASE、2012)